

## 6月の言葉

## 『骨格予算』

次期町長選挙に不出馬表明をした執行権者が来年度の 予算を当初予算案として上程する事はありえない。 そこで、義務的経費や継続的事業程度を編成した予算。

## 黥

## 6月のお薦め



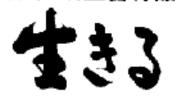
黒沢明監督映画の作歴は、ベートーベンの作歴とよく似ています。 『姿三四郎』が交響曲第1番。『生きる』が第五番(運命)。『七 人の侍』が第6番(田園)。『影武者』が第9番(合唱つき)。

『生きる』は、42歳の時の作品。『七人の侍』は、その翌年です。 こんな事からも巨匠を垣間見る事例です。

また、黒沢明監督映画は、人が死ぬ恐怖は伝えますが、瞬間を見せません。昨今のテレビなど演出効果に疑問を感じます。



黒澤 明監督作品



黒沢明監督映画の『生きる』は、昭和27年の作品です。終戦から7年が経過し、いわゆる段階の世代が成長していき、高度成長経済が 息吹き始めた時代の作品です。

住民参加の地域活動と、住民協働の町づくりを、公園づくりを通して感じます。今、叫ばれている「住民自治」に思いがつながって行く 作品だと思います。

住民が望むサービスを提供するため、住民の意見を取り入れ、反映されるように努力し、住民自身が町づくりに参加し、参画意識を高める事が、町の活性化の為に無くてはならない事だと感じ取りました。

無気力・無感動な人生を送ってきた公務員が「生きる」事に目覚め、「やるべき仕事」を見つけ、本当に「生きる」為に生まれ替わった!

作風は、『羅生門』に似ています。全体を流した後、個々の証言により物語の断片を小出しする方法です。

最後まで観なければ全体が理解できません。 ナレーションが絶妙です。冒頭のレントゲン 写真を写してのナレーション、そして主人公が 映しだされ「・・・今、彼は、生きているとは いえないからだ。」と言う強烈さです。

しかし、この映画の最後には、ナレーション が有りません。何処に出てくるのか?

「彼らは無名のまま、風のように去った。しかし、彼らの優しい心と勇ましい行為は、いまなお美しく語り伝えられている。彼らこそ侍だ!」『七人の侍』のラストシーンであります。



